

社会に役立つ人間たれ

隊友会顧問・福田忠典

「三つ子の魂百まで」という言葉がある。

私が生まれた昭和19年11月は大東亜戦争末期。父は満州戦線の第一線に。長期にわたる大戦で国内は食料・物資不足。農家の我が家も、大黒柱の長男や男手が戦地に召集され、お米も作れず。そんな中で生まれた小生は、栄養失調で、母乳も出ず、5日の命と言われるも、何とか生き延びる。

父の方は、昭和19年6月に3度目の応召を受けて、満州戦線で命懸け、何とか生き延びるも、敗戦に伴い、そのままシベリヤに抑留され、一切の音信不通に。家族は、死んだものと、諦めていたが、昭和22年3月、前触れもなく、突然、生きて帰ってきた由。

今のウクライナ戦争以上に、厳しい状況だったものと想像される。

昭和12年8月、シナ事変勃発により初めて動員下令されて以来、満州戦線での瀕死の重傷、シベリヤでの捕虜と、生死の境を生き抜いて来た父は、ともかく厳しく、怖かった。幼い頃は、父親に抱かれたような記憶はなく、逃げ回っていたように思う。

学校へ行き、成長するにつれて、「一生懸命勉強して、一番になれ」「立派な職業について、社会に役立つ人間になれ」と。外で動き回るのが好きな私は、益々勉強嫌いに。

厳しい父の元を離れたい一心で、防衛大学校を選んだ。

栄養失調の死に損ないが、集団生活で鍛えられ、柔道にもチャレンジし（後に3段に）、過酷な訓練にも耐えられるようになった。北は北海道から南は九州まで、日本各地の部隊や演習場で、厳しい訓練に挑戦し、部隊指揮官や幕僚として、何とかその任務を全うすることが出来た。「運・鈍・根」に恵まれ、首都圏防衛を担う「第1師団長」も拝命した。

家内も徳島出身ということで、生まれ故郷の徳島の地に帰ってきたが、残念ながら、今の徳島では、私のような経歴の持ち主は、どうも徳島の風土には、なじめないようである。祝日に、国旗を掲揚すると、我が家だけで、近所の皆さんからは「変わった人」と。

「戦争の無い日本で、幹部は命令するだけで給料を一杯貰って、優雅な職業」「国費で日本全国を旅行させてもらいおまけに2回も外国旅行・留学」「定年後は年金を一杯貰い悠々自適の生活」等々。憲法で認められていない自衛隊は「張り子のトラ」扱い？

死生観を確立し、有事を想定し日々に備えて来た人間にとって、極めて不本意な話ばかりである。実際に現役間、訓練等で危険な場面・死にそうになったことは、何回もある。（沖縄への訓練の際、搭乗機が墜落するも胴体着水に成功し無事に脱出。大砲の射撃訓練で、砲列近くで弾丸が破裂、等々）

平和、平和と唱えるだけで、自らを守る意思と防衛力を持たない現在の日本。泥沼化するウクライナ戦線を見るにつけ、我が国の将来は我々の幼少期同様？歴史は繰り返すか。

齢80歳、身体各所にガタが来て、自分の命を維持していくのに戦々恐々、精一杯となってきた。あまり気張るのは止めて、出来るだけ社会に迷惑を掛けないように、「心静かに、名もなく、清く、安らかに」生きて行きたいものである。

一方で、「三つ子の魂百まで」。命ある限り、愚直に「社会に役立つ人間」としての心意気（父の教え）を、秘かに持ち続けたいものである。